

優秀賞 全日本中学校長会会長賞

命の源、「水」

徳島県 東みよし町立三好中学校

三年 藤本 春佳

仮想水（バーチャルウォーター）―ある日の新聞記事のなかで出会った言葉だ。節水の本当の意味を理解しようとするともなく、ただ何となく、まるで流行にのるよう節水活動を続けてきた私。そして、私一人の節水が、それほど価値のあることなのかと内心疑いながら、環境保全に協力しているつもりになっていた私。そんな私が、「水」に生かされている自分を強く意識し、「水」についてもっと知りたい守りたい、未来について考えたい、と強烈に思わせてくれた言葉だ。

それまでの私にとっての水とは、日常生活の中で私が都合よく関わる、限りなく直接的で視覚的な水、つまり、私の毎日を当たり前のように支えてくれる、私中心の「水」だった。それは、朝起きて飲むコップの水。洗顔や歯磨きのための水。植物の冠水や洗濯のための水。食事づくりのための水。そして、入浴や手洗いに使う水、等々だ。

ところが、仮想水を知ること、私の毎日の生活のなかに、私の目に触れることのない間接的で貴重な水の流れを体中に感じた。それは、世界中のあちこちで生まれた、全生命の源である大切な水。私をここまで育ててくれたと言っても過言ではない。まさに命の水なのだ。私は、便利で衛生的な生活のため、数々の欲求を満たすために、この貴重な水を大量に、ありえないスピードで、酷使し続けてきたことに気付いたので。

仮想水（バーチャルウォーター）とは、農産物や畜産物の生産のために必要とされた水を指す（これらに比べれば、工業生産にかかる仮想水は少量とされる）。例えば、スパゲティ―食分百グラムのためには約二百リットル、とうもろこし一本二百グラムのためには八十リットル、コーヒー一杯十グラムのためには二百リットルという量の水がそれぞれを生産過程で必要とされる。仮想水の考え方に沿えば、私の大好きなハンバーガーの仮想水量は、なんと、牛肉（九百二十七リットル）とパン（七十二リットル）を合わせただけで、九百九十九リットルにもなってしまう。ハンバーガー一個を食べるたびに、日頃手にする五百ミリペットボトル約二千本もの水を私は同時に摂取していたことになるのだ。同様に、カレーライス一皿では約二千二百本、牛丼では三千八百本分、日本茶一杯分でさえ四十本もの仮想水が算出されるといふ。この驚愕の数字に、私はただただ茫然と途方に暮れるばかりだ。このように考えれば、食糧の多くを輸入に頼っている我が国は、同時に大量の水を輸入している水輸入大国だということになるだろう。

仮想水についての学習は、私の、そして、私の家族の「水」に対する意識を根本的に変えた。「水を流しっぱなしで歯磨きしないで」「シャワーの水はこまめに止めて」「洗剤は使わずにすすいで適量で」―等々、節水生活は我が家での常識となり、何より、どんな少しの食べ物をも残さないよう、捨てないよう、工夫するようになった。目には見えない「水」の息吹を、食卓に並ぶ全ての食べ物から、そして、日常のあらゆる場面から感じとることができるようになったからだ。

我が国は、豊富な水資源と大量の仮想水で生み出された自他国の物資の恩恵を受け、著しい発展を遂げてきた。しかし、仮想水の現状を知るにつれ、不衛生で劣悪な水環境のなかでの生活を強いられ、生命の危険にさらされながら生きていく人々が世界には大勢いる。このような世界状況のなかで私達にできること―それは、水への敬意と感謝の気持ちを持って生活の無駄を省き、全力で水を守っていくこと―それを守ることだ。できることから、私もしっかりと行動していこう。全ての生命の源、大切な「水」を守るために。